

【実践報告】

教育実習Ⅱ・Ⅲ（小）の報告

広島文教大学教育学部教育学科

教授 佐伯育郎 教授 村上典章

准教授 長澤希

教職センター 特任講師 小川雅史

はじめに

本科目は、小学校教員を目指す学生が、実際の教育現場に出て4週間（実質20日間）の観察・参加・授業実習を行う。実習を通して、子どもの実態を理解し、現場の教員と学校の実態、地域との関係等々を体験的に理解するとともに、教員としての使命を自覚し、教育に対する意欲を高め、教員として必要な資質能力の向上に向けて自己の学習課題を明らかにすることを目的とする。今年度の履修者は77名であった。昨年度全面的に改訂した『教育実習記録』は、毎日の日誌から指導担当教諭のコメント欄を削除し印のみにするなど、今年度も一部改訂を行った。

本科目の到達目標は、①教職に対する自覚、②児童一人ひとりの価値の尊重、③他者の理解と自己の変革、④教材研究、⑤授業展開、⑥児童の集団活動の理解と指導、⑦事務・実務能力、以上7項目である。この7項目で実習校に実習状況を評価していただいた結果に、事前事後指導を踏まえて課題に取り組んだ結果を加えて、4人の担当者によって総合的に評価した。

1 2022年度の学修内容とスケジュール

日時	概要
7/20(水)5コマ	【直前説明会Ⅰ】事前訪問、提出書類配付（教育実習記録含む）、日誌の書き方
8/4(木)5コマ	【直前説明会Ⅱ】班打ち合わせ、班別テーマ検討
事前学修	・班別テーマ（共通課題）と事前学修計画、個人の実習目標の提出（Teamsを使用、4人の担当で添削） ・訪問指導担当教員への挨拶（実習目標提出） ・模擬授業、教材研究、指導案、教育研究（班別テーマの事前研究）など ・実習校との直前打ち合わせ
実習	最も早い学生の開始日が8/25。最も遅い学生の最終日が11/14。
事後学修	A（52人）：①10/28(金)5コマ ②班（中間報告書提出） ③11/18(金)5コマ B（25人）：①11/18(金)5コマ ②班（中間報告書提出） ③12/5(月)5コマ ※Glexaに班別の中間報告書を掲示し、掲示板を通じた質疑応答の場も作る。
12/24まで	教育実習記録・最終報告書の提出 ※班の議論を参考にして研究をまとめたものが個人の最終報告書となる（方法、教材、子ども、教員、学校の問題について、班の討議や資料調査などを通して深く認識し、自分の課題・解決策を探る）。
2月～	教育実習記録の返却

2 事後学修

昨年度は、実習期間によって履修生をA・B・Cの3グループに分け、各グループが2コマ、計4コマの事後学修を行った。今年度は、A・Bの2グループに分け、各グループが2コマ、計3コマに変更した。新たな試みとして、班（3～5人）は、実習期間だけでなく実習地域も考慮に入れて編成した。昨年度の実習生である4年生（セミナー委員）のアイデアを取り入れたものである。実習後の教員採用試験に向けた取組、県人会や教採セミナーへとつなげるよう改善した。

事後学修会の内容は昨年度を踏襲し、班での議論を「中間報告書」（A4用紙2枚分）にまとめ、Glexaに設けた掲示板で共有し、お互いに意見交換する場を設けた。「中間報告書」は班ごとに1つ作成し、締め切りは1回目の報告会の2週間後とした。学生には、自分以外の5班分のコメントをするように指示した。第2回目の事後学修会では、班でGlexaのコメントを共有して回答し、「最終報告書」を仕上げる準備を行った。「最終報告書」（A4用紙2枚分）については、班のテーマや議論を踏まえて個人で取り組む課題とし、実習で学んだことについて自分の実習経験を中心にしてまとめた。

3 改善点と今後の課題

(1) 事前学修のあり方

今年度は、事前学修の方法を改善した。Microsoft Teamsを使用して、班別テーマ（共通課題）と事前学修計画、個人の実習目標を班で共有するとともに、4人の担当で添削した。個人の実習目標は、昨年度はやや抽象的な目標であったため、以下の学生のように数値化・具体化することで改善した。しかし、教育実習記録での「実習のまとめ」において数値化・具体化した成果が見られなかった学生も少なくなかった。

A1班（鳥根）	5人
班別のテーマ（共通課題）	授業中における児童への対応と支援
事前学修計画 ・模擬授業・教材研究 ・指導案検討・教育研究 (いつ、どこで・どんな方法で、何を)	<ul style="list-style-type: none"> ・教材研究は、教科書や教師用指導書を参考にしながら、担当の学年に応じた指導案を各自で作る。 ・指導案検討は、完成した時点でオンラインを通して行い、お互いに意見を出し合う。 ・授業中における児童への対応と支援については、文献やHPを参照して研究する。鳥根県の教育委員会のHPも見ておく。 ・模擬授業は、必要に応じてオンラインで行う。

教育実習Ⅱ・Ⅲ（小）の個人目標・課題	
1 授業力の向上	1-1 指導教諭の実施する授業を観察し、児童が主体的に学ぶことができる支援・配慮について観察し、実習中に3つ以上の工夫点を見つける。 1-2 授業を実践する中で、児童にとってわかりやすい声かけや話し方を見つけて、実習中に3つ以上の工夫点を身に付ける。 1-3 授業の後に指導教諭の助言を踏まえて、自分の授業や学習指導案を見直し、改善点を3つ以上見つける。
2 児童理解	2-1 1日につき5人以上の児童と関わり、一人ひとりの性格や課題を把握し、長所を見つける。 2-2 児童と教師がどのような関係性を築き、そのために教師が児童にどのような働きかけや関わり方をしているかを観察する。 2-3 実習する教室や他の教室を観察し、児童が学習しやすい環境にするための工夫点を実習中に3つ以上見つける。

3 学校・学級経営	<p>3-1 学級担任としての業務を補助しながら、学級担任の役割や職務内容を3つ以上理解する。</p> <p>3-2 児童と関わる中で見つけた児童一人ひとりの長所を学級経営に活かす方法を3つ以上理解する。</p> <p>3-3 指導教諭を観察し、積極的に質問して、教員同士での十分な意思疎通を図る方法や、家庭との連携する方法を3つ以上理解する。</p>
-----------	--

(2) 事後学修のあり方

事後学修は、昨年度の方法を踏襲して行った。報告会については、昨年度は4回だったところを、グループを2つに減らし、3回にした。A・Bグループ（全受講生）が参加する2回目では、4年生のセミナー委員が参加し、報告会後の教員採用試験対策セミナーや県人会についての話をすることで進路選択に向けての意識を高めた。

しかし、昨年度と同様Glexaによる意見交流が主体であったため、1つの教室に集まる意味が薄れている点が課題であった。今後は、班による「中間報告書」の後に個人による「最終報告書」という学修の流れ、他学年の学生の参加も含めて、事後学修のあり方についても再検討する必要がある。

(3) 単位認定に関する評価・補講

今年度も、実習校の「教育実習評価票」を基礎として、教育実習記録の内容と事前事後の学修・提出課題等を参照しながら、4人の担当者によって単位認定に関する評価を確定させた。

実習校の事情により実習期間が少ない学生には、学外での補講として広島市教育センターでの研修や実習校での研究会に参加させることで充足した。